

南極OB会 会報

No. 30

発行 南極 OB 会
会長 国分 征
編集 広報委員会

今号の主な内容

- 新年のご挨拶 ○昭和基地から新年のメッセージ ○第 58 次観測隊の壮行会開催
- 壮行会講演会「南極観測 60 年、思い出す人々」○第 58 次南極観測計画の概要
- 話題：BS7 (テレビ東京系) で南極特集 ○“宗谷”37 年ぶりの引っ越し！
- 小型雪上車 SM-254 の動態保存に向けて
- 南極関連情報 ○支部便り (山陽、東海、北陸、山陰) ○隊次報告 (8、20、26、27 次)
- 会員の広場 ○広報委員会からのお知らせ

新年のご挨拶

南極 OB 会会長 国分 征

南極観測は、1 月 29 日には昭和基地開設 60 周年を迎える。OB 会では、昨年、南極観測 60 周年記念事業を立ち上げることにし、その活動の一環として、支部を中心とした講演会開催や出版などを企画した。すでに北海道、山陽、東海、北陸、山陰では、各支部による講演会などが催された。また、宮城、九州、青森支部による行事も計画されている。これまでの講演会活動は、「南極の歴史」講話会など、東京を中心として行われてきた。東京以外の地域では、ほとんどの場合、記念事業の中での開催であった、東京以外の地域で、経常的な開催を続けていくことは、容易なことではないと思われるが、何らかのかたちで、アウトリーチ活動を続けていくことを考えるべきであろう。

これまでの南極 OB 会は、社会的にみれば単なる同窓会のような任意団体であったため、活動に限界があった。OB 会が、隊次という横つながりが強い同窓会的な会としてではなく、幅広い活動を続けていくためには、どういう形が望ましいか。発足以来いろいろと議論されてきたが、なかなかまとまらなかった



南極 OB 会総会での国分会長

が、これまでの OB 会事業委員会に対応する機能を一般社団法人として登録することが、一つの方策であることとまとめ、形を整えた。公益性を目的とする委託事業など収益性のある活動なども実施できる基盤を作ることがこの目的である。

今後の OB 会の活動について会員各位の積極的なご意見をお寄せください。

<昭和基地から新年のメッセージ>

新年明けましておめでとうございます。
ブリザードに翻弄され、積雪の多さに悩ま

された冬を乗り越え、昭和基地は夏の盛りを迎えています。



10年ぶりに海水が流出したオングル海峡、2016年4月27日見晴らし岩上空より撮影

12月23日に58次隊の乗ったヘリコプター第1便が到着。その後優先物資空輸を終えて12月28日に見晴らし岩沖に「しらせ」が接岸しました。毎年繰り返される光景ですが、真新しい作業服に身を包んだ58次隊と薄汚れた服に日焼けした顔の57次越冬隊が協力して輸送や作業の引継ぎに勤しんでいます。

越冬中の最大のトピックスとしては、やはり海水の流出でしょうか。3月下旬に弁天島付近に開放水面が現れた後、3月31日には西の浦沖の海が開き、4月に入るとオングル海峡の海氷も徐々に流され始めました。4月末には広大なリュツォ・ホルム湾全体の多年氷が流出。岩島の北東方向にまで開放水面が広がり、昭和基地からとっつき岬方面の海氷がかるうじて残った状態となりました。

極夜が明けた後も一進一退を繰り返し、オングル海峡の海氷は順調に成長しましたが、沿岸で予定していたオペレーションは縮小せざるを得ませんでした。

野外に出かけるチャンスは減りましたが、昭和基地での観測と設営作業は順調に進み、除雪も何とか間に合って58次隊を受け入れることができました。

残り1カ月の越冬生活ですが、安全を最優先に作業を進め、58次越冬隊に基地の運営を引き継いで行きます。

皆様にとって良き1年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

第57次南極地域観測隊

越冬隊長樋口和生および越冬隊員一同

第58次観測隊の壮行会開催

南極OB会主催の第58次南極観測隊の壮行会が、2016年11月2日（木）、午後6時半より、レストラン「アラスカ」パレスサイド店で開催された。第58次隊員32名を含め、総勢70名の参加があった。國分会長の挨拶の後、川口貞男氏（国立極地研究所名誉教授、前南極OB会会長、2,3,8,11,13,21,26次隊）による南極観測60周年記念講演があった。宗谷時代に活躍した隊員たちの紹介など当時の貴重なお話をされた（別項）。続いて、第58次観測隊長本吉洋一氏から観測隊の概要が紹介された（別項）。

懇親会では土井浩一郎氏（41, 45次越冬、57次夏）の司会進行の下で、國分会長の挨拶、

来賓の祝辞の後、歓談に入った。樋口和生第57次越冬隊長他隊員一同より第58次隊へ向けての温かいメッセージが披露された。國分会長より観測隊の壮途を祝して、南極OB会が60周年記念として作成した「南極観測隊すごろく」の進呈があった。因みに、このすごろくは観測隊の候補に選ばれてから、昭和基地の越冬を終えるまで、待ち構えている様々な難関をクリアして晴れて帰国の途につけるという一連の南極物語が楽しめる。会場から全員の記念撮影のリクエストがあり、和やかな雰囲気写真を写真に収めた。最後に、竹内貞男氏による中締めで会を締めくくった。



壮行会参加者の皆さん

「南極観測 60 年、思い出す人々」

川口貞男（2 次夏、3 次冬、8 次冬、11 次夏隊長、13 次冬隊長、21 次冬隊長、26 次隊長、平成 19 年から平成 24 年まで南極 OB 会長）

朝日新聞社の矢田喜美雄、半澤朔一郎氏などが言い出して、朝日新聞は学術会議の茅 誠司、気象庁長官（当時中央气象台長）和達清夫氏などに設営は朝日が手伝うので日本も参加してはとの申し出があった。茅、和達氏は当時の文部大臣松村謙三氏に日本の参加を要望した。松村大臣は早大の学生の頃、白瀬探検隊を芝浦で見送り、大変感激した。最近暗い話ばかりだが、こういう明るい事が欲しかった。やろうという事になった。しかしまだ、その時にはいくら位かかるという事は全く分らなかった。朝日新聞社が一億円持つと後一億もあればと考えたらしい。観測遂行に大変貢献した南極の「育ての親」といわれている文部省の審議官だった岡野澄氏が後に「盲蛇に怖じず」との諺があるが、南極事業の発端を顧みるとそんな想いがすると言っている。第一次隊の出発までに宗谷の改装費だけで 5 億円がかかっている。朝日新聞社は一億円の寄付の他に、募金をしてくれた。これは多くの人に南極観測事業の宣伝になったのではないか。

南極観測の公式な意味での最初の動き出しは昭和 31 年 3 月の乗鞍岳の訓練であった。隊員候補者 70 名位、訓練のアシスタントとして東大山の会を中心に 10 名位、報道関係者 100 名近くの大所帯であった。途中、中部



講師の川口貞男氏

日本新聞社の飛行機事故があった。さらに、犬を使わなくてはならないということで、稚内で犬の訓練が始まった。

南極観測はまず予備観測を始めてから、場合によっては越冬観測もやって本格観測をやるようになっていた。最初は西オングル島の北東側を基地にしようということであった。ここから雪上車、犬橇などによる輸送で約 150 トンの荷物を運び込めた。雪上車による輸送はパドルで大変であったが、氷山の風下側を通れば大丈夫であることがわかった。これは元々、永田先生も気がついていたことで、

永田日記にも書いてあった。建設の専門家は、何人も行けたわけではなく、1人の棟梁の下で研究者達が建てるのだが、勿論建設機械は全て人の肩で運び組み立てを行った。日本の建築学会は、東京工大の二見先生を長として南極建築委員会を設け、木造のプレハブを取入れ無理なく建てられるものとしてくれた。約40㎡の建物3棟と発電棟が出来、無線機も搬入され、アンテナも据えられ、銚子無線局との直接交信が出来、越冬の条件が整ったとして、(予備観測)第1次越冬観測が認知された。

この時連れて行った犬橿は西堀隊長の発案で昭和31年の2月に北大の犬飼哲夫先生にお願いしたものである。北海道内の樺太犬を探し集め犬橿2台も準備する事ができた。

第二次隊はバートンアイランド号による宗谷の支援があったが、犬を残置したことがかなり批判を受けた。第三次隊ではシコルスキー型のヘリコプターを持っていったことがよかった。越冬隊は村内必典、小口高、吉田長憲、村山雅美さんなど、まだまだ軍の出身者が多く、14人のうち7名が海軍であった。第6次隊が終了すると、村山さんは中曽根康弘、長谷川峻代議士をアメリカの基地、マクマー

ドに派遣したが、その時、村山さんは昔の戦友であった人に話を付けて、3人分の旅費を出させたことがあった。

観測船「ふじ」については30億円の経費が通り、日本鋼管で建造された。船の名前については44万通という膨大な数の応募があり、中でも開南丸というのが多かったと記憶している。日本鋼管の鶴見造船で皇太子殿下、美智子妃殿下のテープカットがあった。第11次隊では美智子さんから電報もあった。

南極観測の再開があったら何をやるのかであるが、これは極点旅行であった。大型の雪上車を作って、極点旅行に使用し、4000キロを走破した。もう一つはロケットによるオーロラ観測であった。第8次隊ではロケットを見たこともないという隊員が多かった。専門家は日本にはいるが、ロケットを南極でいかに打ち上げるかが問題であった。そのために、鉄のやぐらとタダノのクレーンを持ち込んだ。昭和基地への物資のうち、半分が燃料で発電機については、当時は発電機の効率は30~35%、改良が進み70~80%へ、今はもっと改善されていると聞く。日大の栗野さんはじめ皆さんのおかげだ。

第58次南極観測計画の概要

本吉洋一（第58次南極観測隊長）

第58次隊は越冬隊33名、夏隊35名の68名の観測隊の編成であり、他に、同行者25名を加えて、総勢93名の大所帯である。その中に女性が13名、外国人7名が含まれる。第58次隊の観測項目は第IX期六カ年計画の最初の年として、大型の重点研究「南極から迫る地球システム変動」が各観測分野で実施される。電波やレーザー光、ミリ波放射を用いて南極上空の波動、循環、温度、組成変動を捉える観測であるが、この研究は第VIII期から継続してきたパンジーレーダーの通年システム観測と併に実施される。他に、海洋観測、S17における大気観測、ペンギンの潜水調査、地質観測を行う。外国人の参加の中でもタイ、モンゴル、インドネシアのアジアから3名の研究者が参加することも特徴である。社会科学のテーマを持った研究者も参加し、南極条約、バイオプロスペクティング、鉱物資源の



第58次隊観測計画を紹介する本吉洋一氏

調査研究を行う。アウトリーチ活動では先生が2名参加し、南極授業を行う。また、設営関連では基本観測棟建設等、大型の作業が予定されている。

BS7（テレビ東京系）で南極特集

柴田鉄治（7次夏、47次夏）

テレビのBSジャパン7チャンネル（テレビ東京系列）で、2月3日午後9時から1時間番組で南極観測隊の特集番組が放送されます。「武田鉄矢の昭和は輝いていた」というシリーズ番組の一つに「南極観測隊」が取り上げられたものです。

武田鉄矢さんとテレビ東京アナウンサーの須黒清華さんの司会で、ゲストとして招かれたのは、日大名誉教授の平山善吉さん（1次、2次夏隊、3次越冬）と、私、科学ジャーナリストの柴田鉄治（7次、47次夏隊）でした。



収録を終えてー

左から武田鉄矢、平山善吉、柴田鉄治、須黒清華の各氏

12月13日に約2時間かけて収録がなされました。それを1時間に削って放送されます。どこが削られるのか分からないので、放送されるものがこの通りかどうかは分かりませんが、収録したときの大雑把な筋書きを紹介します。興味がありましたら、ぜひ当日、番組を見てください。

最初に、南極大陸や昭和基地の位置について地球儀や地図を使って説明し、日本の37倍の広さがあることや平均2000メートルもの氷で覆われていることを説明します。次いで、その南極の氷が出てきて「何千年、何万年の空気が」と説明し、さらに私が7次隊のとき

に持ち帰った、ブリザードでボコボコに穴の開いた南極の石を紹介して「いまは環境保全のため南極の石の持ち帰りは禁じられています」と私が解説します。

続いて南極観測の歴史に入り、白瀬探検隊の最近デジタル復元化された映像を見せながら、早稲田大学を創った大隈重信公や朝日新聞社の支援を得て、アムンゼン・スコットの南極点一番乗り競争のあった同じ年に南極大陸に上陸していたことを、平山さんと私が説明します。

そして観測船「宗谷」の第1次観測隊による昭和基地の建設へー敗戦から僅か10年。当時の国民を元気づけた3つのニュースの1つと言われたことや、子どもたちまで「南極隊にあげてください」と5円玉、10円玉を募金したこと、さらにはプレハブ住宅や冷凍食品などは南極観測がきっかけで開発されたことを、第1次隊で建築担当だった平山さんが実体験をまじえて解説しました。

最大のヤマ場は、やはり「生きていたタロ、ジロ」です。2次隊が氷につかまって越冬隊を送ることができなくなり、基地に15頭のカラフト犬を置き去りにしたことで観測隊が愛犬家から激しく責められたこと、それだけに3次隊が生きていたタロ、ジロを発見したときの隊員や国民の驚きや興奮、どちらも実体験した平山さんの話は、横で聞いていた私まで興奮してしまいました。

あれから半世紀が過ぎ、基地での生活は風呂もトイレも通信事情も、様変わりしました。その変化を10年前に昭和基地を訪れた私が説明して収録を終えました。終わって、「なるほど、南極観測の昭和は輝いていたなあ」とあらためて思いました。

さて、どんな番組になったか、私も当日を楽しみにしています。



“宗谷” 37 年ぶりの引 っ越し！

木村洋子（会友）

2016 年 9 月 23 日 早朝、小雨が降り続く中“宗谷”の移転作業が行われました。現役引退後、博物館として余生を送りはじめてから、じつに 37 年ぶりの引っ越しとなりました。新しい棧橋までそれほど距離はありませんが、傷みの激しい船体を押すことができないため、取り囲むように配置された 5 隻の船で前後左右のバランスを取りながら曳航し、旧棧橋から航路まで出た後、U ターンして 対岸の新棧橋へと移動しました。

旧棧橋から離れ航路に浮かぶ“宗谷”は、まるで現役に戻ったかのような勇姿を披露してくれました。移転後、繫留の向きは出船から入船に変わりましたが、陸から迫力のある船首が見られるようになり、船尾甲板からは、東京オリンピックまでに完成予定の「新客船ふ頭ターミナル」もよく見えるはずなので、



移転後の宗谷

ここから様々な大型客船の往来も楽しめそうです。“宗谷”が日本の南極観測事業を切り開いてから 60 年。

初代南極観測船、そして歴史の語りべとして、これからも末永く愛される存在でいてくれる事を願っています。

※現在は公開準備期間中のため見学できませんが、2017 年 4 月から公開が再開される予定です。詳しくは船の科学館 HP でお確かめ下さい。



宗谷移転中

小型雪上車 SM-254 の動態保存に向けて

中島英彰（31 次冬、48 次冬、茨城支部）

現在、つくばエキスポセンター^(*)に、大原鉄工所製の南極用小型雪上車 SM-254 が展示されている。SM-254 は、南極用に製作された 5 台の雪上車 SM-25S タイプの 4 台目にあたり、2011 年以來つくばエキスポセンターで展示されている。SM-25S タイプは、それ以前の水上浮揚式雪上車 SM-15S, SM-20S タイプの後継タイプの車両で、浮力はないものの

牽引力を増強し、沿岸の調査旅行や海氷調査等で活躍した。

SM-25S タイプは昭和 61 年（1986 年）の第 28 次隊における 1 号機から計 5 台が昭和基地に持ち込まれ、そのすべてが現在は日本に持ち帰られ、各地で展示されている。SM-251 は稚内市青少年科学館に、SM-252 は北海道陸別町イベントセンターに、SM-253 は

福山自動車時計博物館に、SM-255 は千葉県松戸市の昭和の杜に展示されている。

つくばエキスポセンターに展示されている SM-254 は、1988 年に第 30 次隊が昭和基地に持ち込んだもので、2007 年に運用を終えるまで約 10,000 km 走行した。私も、第 31 次越冬隊へ参加した際に、何回かこの雪上車に乗った記憶がある。その後、東日本大震災直後の 2011 年春にエキスポセンターに持ち込まれた。なお、SM-25S タイプは他のタイプの雪上車と異なり、エンジンからの動力を油圧を用いてキャタピラーに伝えるタイプとなっており、特に後期の SM-254, SM-255 は良く見る 2 本レバーの操舵器ではなく、ハンドルタイプの操舵器を用いている。ちなみに、



SM-254 動態保存に向けて作業する第 31 次越冬隊 OB (左から、中島、堀辺、清水)

国内では現在計 13 台の南極から帰ってきた雪上車が保存されているが、今も走れる状態で保存されている車両は殆んどないようである。

南極 OB 会茨城支部は、2006 年 10 月に南極観測 50 周年を記念してつくばで行われた「南極教室」以来活動を開始した。つくばから南極に隊員を送り込んでいる、気象庁、国土地理院、筑波大、産総研、環境研、防災科研、JAXA、農研機構などの研究機関の OB/OG と、ほぼ毎年南極に機械隊員を送り込んでいる日立製作所の OB が主なメンバーである。やがてつくばエキスポセンターと協力して、2008 年から「南極教室」や「ミーツ・ザ・サイエンス」という夏のイベントで、南極との TV 会議中継や帰国隊員による帰国報告会が開催されるようになった。雪上車の到着に合わせ、エキスポセンターの職員と南極 OB 会茨城支部の有志メンバーにより、雪上車展示・補修のためのチーム（通称・「SM プロジェクト」）が結成された。これまでに、ボ

ディー高圧洗浄、足回り防錆塗装、ボディー全塗装、割れていたフロントガラスの交換、幌の交換、ドアヒンジ交換、タイヤ交換などを行ってきた。私はこれらの作業に関わるうちに、いつのころからか「何とかして雪上車のエンジンをかけ、できることなら雪上車を動かして動態保存し、子供たちを乗せてエキスポセンターの敷地内を走行することが出来ないものだろうか？」と思い始めるようになった。

そこで、昨年秋の 2016 年 10 月 16 日(日)、第 31 次隊の仲間と船橋の SHIRASE 5002 で同窓会を行った帰りに、同じ隊で越冬したいすゞ自動車の堀辺隊員と、元環境研の清水隊員とともにエキスポセンターに赴き、SM-254 のエンジン始動を試みた。もともとのバッテリーは上がっていたので、自分たちの車からバッテリーを外し、SM-254 に接続するも、ウンともスンとも言わない。バッテリーからのケーブルをたどると、どうやらイグニションスイッチからの電圧を基にバッテリーとスターターモーターを接続するリレーが死んでいるらしいことが判った。そこで、電線でこのリレー部分を直結することによって、スターターモーターが回転を始めた。でも、10 年ほど動いていなかったエンジンはなかなかかからない。そこで、荒療治ではあるが、バッテリーをもう一個用意し、12V を 24V に変えて元気よくスターターモーターを回したところ、徐々にエンジンが息を吹き返し始め、とうとうエンジンスタートに成功した！このような荒療治を可能にしたのも、くだんのエンジンを作っているいすゞの堀辺隊員に来てもらったおかげである。またリレーの接触不良を見つけたのは、電気関係に詳しい清水隊員である。まさに、「三人寄れば文殊の知恵」であった。ちなみに、エンジンオイルや燃料は、廃車から 10 年たったのちもきれいにそのまま残っていた。さすが、大原製作所の技術力の賜物である。

その後、11 月 19 日、20 日、12 月 25 日と合計のべ 4 回整備作業を行い、駆動用の油圧系の復活作業を行って、キャタピラーを動かすところまで成功した。その際も、長年の風雪で錆びついたネジを回すのに大変苦労した。現在はまだ思った通りに左右へちゃんと舵を切れるまでには至っておらず、その部分の制御系の修復が次なる課題である。また、ホーンは錆びついていて鳴らず、前照灯やフォ

グラブも点かないので、その部分の修復も行う予定である。今後も月に約1回のペースで修復作業を行い、願わくは今年(2017年)の夏ごろまでに補修を完了させた暁には、夏のエキスポセンターの南極イベント等の際に、安全を確保した状態で、子供たちの雪上車試乗会を開催したいと思っている。その際は、安全確保員や運転手、搭乗補助員として、南極OB会のメンバーに協力してもらう予定である。

12月25日には毎日新聞つくば支局の記者の取材も受け、2017年1月12日付の茨城版に掲載していただいた^(*)2)。また、11月20日

にエキスポセンター内でテスト走行した時の動画を、YouTubeに登録してあるので、宜しければご覧ください^(*)3)。

*1: つくばエキスポセンター: 1985年に開催された国際科学技術博覧会(つくばエキスポ)の記念施設として建設され、1986年に科学館として運営を開始。科学の楽しさを伝える展示やサイエンスショーなどを続けている。公益財団法人つくば科学万博記念財団が運営

*2:

<http://mainichi.jp/articles/20170112/ddl/k08/040/061000c>

*3: <https://youtu.be/q9m6RWYe1hk>

南極関連情報

第59次南極地域観測隊長・副隊長決まる

2016年11月10日(木)に開催された第149回南極地域観測統合推進本部総会において第59次南極地域観測隊長兼夏隊長として土井浩一郎氏(41次冬、45次冬、57次夏・観測隊副隊長)、副隊長兼越冬隊長として木津暢彦氏(38次冬、43次冬)を決定した。

文部科学省主催 第58次南極観測隊壮行会

2016年11月10日、明治記念館において南極地域観測統合推進本部主催の壮行会が挙行され、本吉洋一観測隊長兼夏隊長、岡田雅樹副隊長兼越冬隊長以下、夏隊、越冬隊員68名、南極授業担当同行教員2名を含む夏隊同行者(しらせ乗船者等)18名、夏隊同行者(海鷹丸乗船者)9名、大鋸寿宣しらせ艦長以下約180名の乗組員および隊員および乗組員家族、並びに関係者多数が出席した。壮行会では観測隊長、しらせ艦長から出発に当たっての決意が述べられた。また文部科学大臣(代理)、防衛大臣(代理)から壮行の挨拶があり、来賓の国会議員等から激励の挨拶があった。

「しらせ」は11月11日に晴海ふ頭賀を出港、観測隊は27日に成田から出国し、豪州フリマントルで合流し、南極昭和基地に向う。

昭和基地に第一便

2016年12月23日8時28分(昭和基地時間)(日本時間14時22分)、南緯69度01.0

分、東経39度15.7分(昭和基地西方約7マイル)の定着氷に停留中の「しらせ」より、本吉洋一第58次観測隊長ならびに大鋸寿宣艦長が乗ったヘリコプターの第一便が発艦し、同8時29分、第57次越冬隊(樋口和生越冬隊長ほか29名)の待つ昭和基地に到着した。

「しらせ」の昭和基地接岸

「しらせ」が、2016年12月28日(水)現地時間11時57分(日本時間17時57分)、昭和基地の沖合約560mの定着氷に到着し、昭和基地接岸を果たした。

今シーズンは、航路上の氷厚は比較的薄く、往路ラミング回数114回であった。



昭和基地に接岸した「しらせ」

(「第一便」、「接岸」の両記事は、国立極地研究所ホームページより。)

連載 支部便り

支部便り③〇 (山陽支部)

「60年目の南極物語」

—南極OB会山陽支部主催の南極観測60周年記念講演会の報告—

山陽支部の春の交流会において南極観測60周年記念行事を何か出来ないかとの話題が出ていたところに、本部および広島の公民館から講演会開催の依頼があったとの連絡が



講演会の様子

あり、安東公民館が行っている「いきいき長寿大学」との共催という形で、9月21日(水)に開催致しました。

南極観測の今昔ということで、元極地研所長の渡辺興亜さんと支部の第47次越冬隊員の森昭人さんに講演して頂きました。平日の午後の開催にもかかわらず、支部から7人が参加し、夜は、渡辺興亜さんにも参加して頂き、賑やかに交流会を催しました。



森昭人さんの講演風景

渡辺興亜さんからは、「白瀬隊から始まる南極探検・観測の足跡」とのタイトルで、また、森昭人さんは、「昭和基地はどんなところ?～南極観測隊員の生活と自然～」との講演タイトルで、昭和基地の乗り物、気象、昭和基地での仕事と生活、昭和基地近くにいる生き物などをきれいな写真と共に紹介し、最後に「南極クイズ」として参加者に4つの問題を出しました。観測隊員には当たり前の質問でしたが、参加者にはとても好評だったようで、答えを聞いて皆驚いて、初めは見ず知らずの参加者同士で会話が弾んでいました。

(山陽支部 佐藤高晴)

支部便り③① (東海支部)

「南極観測60周年記念講演会」の報告

テーマ：南極から名古屋港へ

南極OB会東海支部では、平成28年11月12日(土曜日)14:30～16:30名古屋港ポートビルにおいて、南極観測60周年記念の行事として、(公財)名古屋みなと振興財団(南極観測船ふじ・名古屋港水族館)との協賛で「南極から名古屋港へ」と題して講演会およびパネル討論会を開催しました。

南極観測60周年記念講演会

講演会では、宮崎多恵子氏(三重大学 生物

資源学部准教授)、松田 乾 氏(名古屋港水族館 飼育展示第一課第三係長)、五味貞介氏(南極OB会東海支部 支部長)の講師により、それぞれ「調べる」「育てる」「食べる」をテーマに、ご講演を頂きました。

・「南極の魚の不思議を調べる」：南極の魚は、南極圏の低温な海に生息し、浮き袋がなく、紫外線を感知する機能を持つ等、特殊な生態系を維持しており、その進化も独特な過程を経た不思議な魚との事です。



宮崎多恵子氏の講演の様子

・「南極の魚を飼う」： その飼育には、特別な低温海水循環装置を必要とし、餌としてプランクトン養殖が必要な事から、南極の魚の飼育と展示は、日本では名古屋港水族館と葛西水族館だけとの事でした。



松田 乾氏の講演の様子

・「南極の魚を釣る・そのお味は？」： 昭和基地では「オングルダボハゼ」「まぼろし」等とても淡泊な魚が釣れ、それらが生息する水深に当たれば、面白いほど良く釣れる。でも、寄生虫がいるので生で食べてはいけないという事のようにです。



五味貞介氏の講演の様子

お3方のお話で、南極の魚について興味深い話が聞けました。講演に対しての質問など

は、アンケートに記入して頂き、それらの回答は、名古屋港水族館のHPに掲載される予定です。

パネル討論会：「南極から名古屋港へ」

パネル討論会は、岩坂泰信氏（名古屋大学名誉教授）の進行で、渡辺研太郎氏（国立極地研究所 教授）、日登 弘 氏（名古屋港水族館 館長）、上井 厚 氏（南極観測船ふじ 館長）並びに3人の講師の方々により、行いました。

各パネラーからは、名古屋港に「ふじ」が係留される事となった経緯、これに伴って水族館が出来て南極コーナーが設けられ、オキアミ（現在も生存展示）をはじめとする南極の魚を展示する事となった経緯等、その歴史が紹介され、「ふじ」の来訪者が年々減少している事、展示していた魚が少なくなった事などの現状が報告され、将来に向けて、名古屋港を観光地として活性化するための取り組みが紹介されました。



パネル討論会の様子

このために現在取り組んでいる課題として、「ふじ」の改装や、展示用の南極の魚を拡充するために、南極観測隊に水族館職員の派遣を検討している事などが話題となり、南極と名古屋港との関わりを深めるための活発な討論がなされました。

南極観測60周年記念特別展示

また、南極観測60周年記念にあたり、名古屋港に南極観測船「ふじ」と名古屋港水族館内に「南極コーナー」が設置・展示されていることから、南極と名古屋港との関わりが深く、「南極から名古屋港へ」をテーマとして10月29日（土）～11月27日（日）の28日間、名古屋港水族館「南極ホール」にて

60周年記念特別展示として開催された。

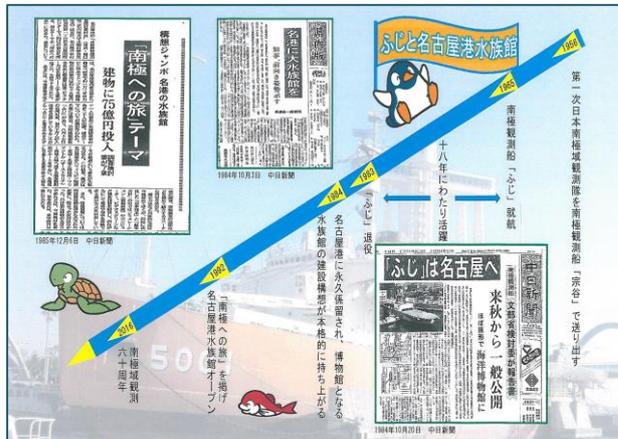


名古屋港水族館「南極ホール」で展示された南極の石など（世界で唯一「南極オキアミの飼育」の関係で少々暗くなっている）

この後、18時から名古屋港近くのファミリーキッチン「おふくろの味」を借り切って、第58次南極地域観測隊の越冬隊員・吉川康文氏（(株)テクノプロ）と土屋達郎氏（中部山岳ガイド協会）及び夏隊員・児島康介氏（名古屋大学）と小塩哲朗氏（名古屋市科学館）の壮行会を行いました。

壮行会にお集まり頂いた関係者は31名で、

五味支部長の開会の挨拶と鈴木副支部長の乾杯の発声で会は始まり、おふくろの味の料理と飲み放題の酒と南極の氷で会は大いに盛り上がり、南極観測事業によって同じ釜の飯を食べた者同士の話や講演会に参加された南極観測事業を支援されてくださる方々との歓談で時は過ぎました。



名古屋港に「ふじ」と「水族館」ができるまで

最後に、派遣される隊員からそれぞれの仕事と抱負の紹介を頂いて、盛大な壮行会に幕を閉じました。

（東海支部 鈴木剛彦・加藤好孝）

支部便り③②（北陸支部）

講演会「南極地域観測を支える機械工学技術」

南極OB会北陸支部は南極観測60周年記念事業の一環として、サイエンスヒルズこまつ（石川県小松市）にて2016年11月12日（土）に講演会を開催致しました。北陸地域では、南極地域観測隊発足の黎明期から特に機械工学技術の分野でコマツ様を筆頭に南極

之氏（金沢大学、第50次越冬）と山田清一氏（コマツOB、第21次越冬、第26次夏隊）の北陸支部会員2名による基調講演と石沢賢二氏（国立極地研究所、第19次越冬、24次



講演会の様子

地域観測に貢献して参りました。このため、南極観測60周年を記念して北陸地域が貢献してきた「機械工学技術」を題材に、香川博



講師の香川博之氏

越冬、28次夏、32次越冬、36次越冬副隊長、50次夏副隊長、53次越冬隊長）より招待講演を行っていただきました。香川氏は「南極地域観測で使用する雪上車の歴史と現状の紹

介」と題して、雪上車の変遷について詳しくお話いただきました。コンテナ櫓が導入されるなど物資輸送形態が大きく変わろうとしている南極での輸送において、機械設計および工学解析の研究を専門とする香川氏より、南極大陸で使用される櫓の走行特性に関する最新の研究成果についてもお話いただきました。

コマツ OB の山田氏は「南極観測で活躍しているコマツの機械技術」と題して、コマツが開発に尽力した南極点到達 KD60 雪上車などコマツの機械技術についてお話いただきました。また、昭和基地より内陸へ約 300 km にあるみずほ基地での越冬体験についてもお話いただき、インフラの整った昭和基地とは異なるみずほ基地での貴重な隊員の生活についても知ることができました。

石沢氏からは「南極大陸での雪上車と航空



北陸支部会長の川田邦夫 氏（左）と
講演された北陸支部会員の山田清一 氏（右）

機による輸送について」と題して、南極のインフラを支える南極輸送の変遷について詳しくご講演いただきました。航空機利用で先行している外国の南極基地についてもご紹介い

ただき、昭和基地との違いについても知ることができました。今後の日本の南極地域観測のますますの発展が予見され、南極観測を支える機械工学技術の重要性を再認識する講演会となりました。

会場では、国立極地研究所から提供いただいた南極観測を紹介するパンフレットと雪上車のペーパークラフトが聴講者に配布され、雪上車を取り上げられることの多かった本講演会において特に雪上車のペーパークラフトが好評でした。講演会には南極 OB 会運営委員会より山岸久雄 氏の出席をはじめ約 70 名のご参加をいただき、盛況のうちに終了できました。なお、本講演会は、南極 OB 会北陸支部、日本機械学会様、精密工学会様との共催であり、小松市教育委員会様、コマツ栗津工場様よりご後援を賜りました。特に会場のサイエンスヒルズこまつとの調整には、北陸



招待講演を行う石沢賢二 氏

支部会員の岡田秀雄 氏（コマツ、第 23 次越冬）にご尽力いただきました。その他関係者様より多くのご支援を頂きましたこと、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

尾崎光紀（第 47 次越冬・宙空）

支部便り③③ （山陰支部）

島根大学南極観測 60 周年記念講演会

平成 28 年 12 月 17 日の午後、南極 OB 会山陰支部の主催（共催：島根大学教育学部環境寺子屋）で、南極観測 60 周年を記念した講演会「もっと伝えたい南極観測隊と南極のこと」が、島根大学教育学部 35 番教室で開催されました。講演会と併設して、南極の氷、生物、岩石などの展示も行われました。南極 OB 会山陰支部では、これまでも昭和基地と TV システムをつないで実施する「南極教室」を島根大学教育学部の附属小・中学校生を対象に実施するなどの実績があります。今回も同



クイズコーナー
（大谷修司教授による司会進行）

附属小・中学校の児童・生徒さんなどが親子

連れで多数参加されました。会場の席はほぼ埋まり、熱気ある講演会になりました。

講演会に先立って、南極に関するクイズが、島根大学教育学部の大谷修司教授（南極 OB 会山陰支部長、29 次越冬隊員、41 次夏隊など）らにより行われました。講演会では、元国立極地研究所所長の渡辺興亜氏（29 越冬隊長、35 次観測隊長など）による「南極観測 60 年の歩み」、鳥取大学の大谷眞二准教授（40 次越冬隊）による「お医者さんがみた越冬隊員の生活と健康」、NPO 法人氷河・雪氷圏環境研究舎の成瀬廉二代表（10 次越冬隊、34 次夏隊長など）による「北極と南極の氷は減りつつあるか?」の 3 件の講演がありました。来場者は、実際に南極地域観測に参加した方たちの生の声を聞くことができ、大変満足した様子でした。

講演会終了後は、昭和基地周辺から運ばれた氷に触ったり、氷の中に含まれている 1 万

年以上前と考えられる空気の泡が水中ではじける音を体験したりするコーナーもあって、



渡辺興亜氏による講演の様子

来場者が楽しんでいました。南極 OB 会山陰支部では、これからも南極地域観測に関する啓蒙活動を行って行く予定です。

山本達之（島根大学生物資源科学部教授；第 49 次夏隊）



連載「帰国後の各隊の動き」（隊次順に掲載）

第 8 次日本南極地域観測隊出航 50 周年記念同窓会

私たち 8 次隊は 1966 年 12 月 1 日、南極観測のために新造されたふじの 2 回目の航海として、東京・晴海ふ頭を出航した。総勢 44 名（越冬 24 名、夏隊 16 名、オブザーバー 1 名、報道 3 名）は無事昭和基地に到着、新しく食堂棟や観測棟などを建設、予定通り帰国した。無事極夜を過ごした越冬隊は、ふじの離岸寸前に発見された福島さんの遺骨とともに帰国した。ちなみに 8 次隊の鳥居隊長は福島さんが遭難したときの 4 次隊の越冬隊長でもあった。また 8 次隊には 4 次隊の参加者が 5 名いた。

出航 50 周年の記念の集いは 10 月 2 日、新宿にある八十八（オーナーは 21 次隊の調理担当中村さん）で開催した。44 名の観測隊のうち 17 名が鬼籍に入り、存命 27 名のうち 14 名が参加した。一同再会と互いの健康を喜び、



8 次隊出席の皆さん

12 時から 16 時まで時間を忘れて語り合った。

会の冒頭、昭和基地から 57 次隊の樋口越冬隊長からのメッセージが紹介され、時空を超えて、皆昭和基地に思いを馳せた。そして 57 次隊の無事の帰国を祈念し、メッセージを送った。

（8 次 神沼克伊）

南極 OB 会報は、2015 年 10 月 15 日に創刊号を発行して以来、今号で 30 号となりました。この十年皆さまには記事の提供をはじめ様々な協力を賜りました。引き続き紙面の充実を計っていきたいと思います。ご支援・ご鞭撻よろしく申し上げます。

第 20 次観測隊の集い

第 20 次隊が日本に帰国したのは昭和 55 年 3 月、もう 36 年の昔である。越冬隊で社長のニックネームで呼ばれ最年少だった者ももうすぐ「准高齢者」になんなんとする。

当初は再会の集まりを 5 年置きにとしたものの、それでは消息が追えなくなるとして、このところ毎年誰か彼かが幹事となり、その地元で参集することになっている。今回は、平成 28 年 11 月 26 日—27 日に厳島神社のある宮島の島内に宿泊ということになった。吉田隊長以下、北は北海道から山崎越冬隊長が、南は沖縄の宮古島からも駆けつけてくれ総勢 18 名が集った。昭和基地以来 37 年ぶりに会う者もあり、近況報告では未だに現役でバリバリと活躍している者、晴耕雨読と言いつつ高齢者とは名ばかりな元気者まで、話題を欠くことなく宴会終了後も大いに盛り上がった。

次は松本で集うこととして厳島神社に参拝



20 次隊参加者の皆さん

をし、折しも世界遺産認定 20 周年ということで外国人を含む大勢の観光客に混じり、悠久の時の流れに身をおいた集いであった。

集いの前には、第 20 次隊有志で宮島市民センターにおいて「南極ってどんどこ」と題した講演会も開催し、親子参加の約 30 名が興味深く聞き入り、将来の隊員候補になるかもしれない少年少女からたくさんの質問も出て楽しく盛会であった。

(20 次 川久保 守)

26 次越冬隊の集い —2016 年 12 月 in 姫路—

26 次越冬隊員で最初に亡くなられた中島幹夫ドクターの 3 回忌を契機に、2011 年より始められた 26 次越冬隊の集いは、毎年つづけられて今回で 6 回目となります。今回は 2016 年 12 月 10、11 日の両日、忘年会を兼ね、幹事の堀川が住む姫路で開催されました。参加者は福西越冬隊長以下の 15 名でした(福西、島本、前野、松村、山岸、神沢、古館、鮎川、奥平、上田、神山、堀川、藤井、村井、川久保)。

10 日午後は、書写山圓教寺の観光を行いました。圓教寺は標高 371m の山上にひらかれた天台宗の別格本山で、ハリウッド映画「ラスト サムライ」や「武蔵」、「軍師 黒田官兵衛」のロケ地として有名です。この時期、書写山ロープウェイは点検・整備のため運休となっており、われわれは岩場の多い参道を登ることになりました。福西隊長は元隊員の安全確保のため、斥候を兼ねて常に先頭に立

ち、一方、遅れがちな人には、数人の仲間が後からフォローするという、当時のチームワークが自然とよみがえってきました。越冬から 32 年を経た現在でも 26 次隊の性格は変わっていないな、ということが確認され、ほっこりしました。

この日はホテル「ニューサンピア姫路ゆめ



26 次参加者の皆さん

さき」で宿泊し、宴会時に各自の近況報告を行いました。その中に、昨年ノーベル賞を受賞された大隅先生と約1年間、一緒に仕事をした思い出を語った方もいました。参加者の現在の年齢は56才から73才にわたり、現役バリバリで活躍している人から、歳を感じさせない肉体労働や知的活動に精を出している準高齢者まで多種多様で、話題が盛り上がりました。

11日午前は、姫路城と西御屋敷跡庭園「好古園」を観光し、午後は、姫路城を囲むビューポイントの散策をしました。この日はたまたま姫路城が世界遺産に登録された記念日であったため、姫路城と好古園の入場料1040円が無料となる幸運に恵まれました。われわれは9:00開門の直後に入場したため、その1時間後から始まった入場制限には引っかからず、

十分に観光を堪能することができました。姫路城を囲むビューポイントの中で、隠れた名所といえるのが姫路城北側の公園の中にあるモダンな休憩所とトイレです。これは女優・若尾文子さんの夫だった建築家、黒川紀章氏の設計によるもので、たいへん高価だったそうです。世界遺産にふさわしい夢のトイレで、記念の連れションをしている3人の後ろ姿が26次隊のブログにアップされています。

35名いた越冬隊員の中で、既に4名の方が逝去されています。孤絶した南極基地で一年間をともにした仲間たちには、いつまでも元気でいて欲しい。26次隊の集いがこれからも末長く継続することを祈りつつ、筆を置きます。

(26次 堀川眞矢)

越冬30周年記念27次会を開催

1986年の越冬から早30年、11月12日から13日にかけて、越冬30周年記念の27次会を17名の参加で開催しました。12日、東京駅の9番線踊り子号乗り場に集合したのは14人、先ず1年ぶりの再会を喜び合いました。列車が東京駅のホームを離れると「乾杯」の声が聞こえてきました。このところの27次会は「列車で行く温泉の旅」となっています。初めて新幹線で秋田へ行ったのが2005年なので、この企画を始めて10年が経過しました。七沢、箱根、石川県片山津、福島県飯坂、秋田にかほ、野沢と行きましたが、伊豆には行っていませんでした。そんなこともあり、今回は下田白浜温泉（ホテル伊豆急）になりました。

下田到着が少し遅れたためホテルに着いてすぐの「到着宴会」はできませんでしたが、その分ゆっくり温泉につかることができました。18時、全員が宴会場に集合して記念撮影をしました。続いて内藤隊長の挨拶・乾杯で宴が始まりました。恒例の近況報告は、27次会を理由に都内に滞在をしている東北弁を多用する方に始まり、大変楽しいそして内容のある報告でした。ホテルの方から料理の紹介があり、海の味を満喫することもできました。2次会は会場を移して326号室で行われました。はじめのうちは近況報告の続きでしたが、やはりメインは30



27次会参加者の皆さん

年前の昭和基地やみずほ基地、旅行中の出来事がそれぞれに話されました。また、30年が経過して初めて明かされたこともありました。更に1次会で聞くことのできない豊富な話題で大いに盛り上がりました。予定の23時に一旦お開きになりましたが、実際に全員が寝たのは翌日でした。

帰りの列車も含めて本当に楽しい2日間でした。今までは都合で参加できず、今世紀に入って初の参加となった人もいました。もちろん連続参加の方も大勢います。家族で参加いただいた方もいます。前日は58次隊しらせが南極に向けて出港しましたが、28次隊の晴海出港から丁度30年が経過しました。当時、昭和・みずほにいた私たちは出港したその日から「第1便」を待っていたことが、まるで昨日のことに思い出されました。

13日、目が覚めて海を見るとサーファーが大勢見えましました。せっかく伊豆急で南下して暖か

い所まで行ったので付近を散策と思いましたが、こちらは時間の関係でできませんでした。次回は帰国 30 周年になります。現時点では那須塩原を予定していますが、いや「関西で」と

いう声もあります。各地を巡って楽しい時間が持てればと思っています。
(27 次 萩無里立人)



訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。
(敬称略)

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
野村彰夫*	26w	宙空	H27.12	72	栗田力男	6	宗谷	H28.10	80
高木八太郎	08s,09w	報道	H28.9	81	箕岡三穂	19w	医学	H28.10	79

*元信州支部長

南極 OB 会アーカイブ事業報告

南極 OB 会は元観測隊員等が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。資料の受け入れについては南極 OB 会事務局にお気軽にご相談ください。

*** 広報委員会からのお知らせ ***

○通信費納入のお願い

今年度最後の会報を皆さまにお届けします。2016 年度通信費をまだ納入していない方は同封の振込用紙で振り込みをお願いします。

○南極観測 60 周年（再開 50 周年）記念事業

今号は、山陽、東海、北陸、山陰各支部の記念行事の取り組みの概要を報告しました。1 月 22 日に東京の一橋講堂でもたくさんの方の参加を得て「記念講演会」を開催しました。今後開催される青森支部（1 月 29 日開催）、九州支部（3 月 18 日開催予定）、宮城支部（7 月までに開催予定）の開催概要も次号以降紹介する予定です。

○少年画報社 ねこばんち（460 円＋税）に掲載された「三毛猫タケシの南極物語」

少年画報社から発行されている子供向けの漫画雑誌に「ねこばんち」の取材に協力しました。この本、全編ねこの物語で網羅されています。この雑誌の '07 新年号に、掲載されたのが、藤風かおるさん作の第 1 次隊と一緒にいった三毛猫の物語です。写真は、「越冬編」の最初のページです。次号は「帰郷編」だそうです。



南極 OB 会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301
 電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635
 メール : nankyoku-ob@mbp.nifty.com
 郵便振込 : 加入者名 南極 OB 会 00110-1-428672
 南極 OB 会ホームページ : <http://www.jare.org/>
